私の生涯教育実践シリーズ'89

旅は学習

千里の知見，万巻の書

(財)北野生涯教育振興会 監修

森　隆夫・斎藤幸一郎・長坂　寛 編

(財)北野生涯教育振興会　監修

私の生涯教育実践シリーズ'89

旅は学習

千里の知見、万巻の書

森　隆夫・斎藤幸一郎・長坂　寛　編

ぎょうせい

旅は学習——千里の知見，万巻の書——

1989年11月10日　初版発行　定価 1,340円（本体 1,301円）
（送料 260円）

監　修　財団法人　北野生涯教育振興会

編　者　森（もり）　隆夫（たかお）
斎藤（さいとう）　幸一郎（こういちろう）
長坂（ながさか）　寛（ひろし）

発行所　株式会社　ぎょうせい

本　社　東京都中央区銀座 7－4－12
営業所　東京都新宿区西五軒町 4 番 2 号
電話 03（268）2141（大代表）
振替口座　東京4－10000番

＜検印省略＞

印刷　㈱行政学会印刷所(Hi)　製本（株）東栄社
ISBN 4-324-01963-0（5103140-00-000）
©1989 Printed in Japan

まえがき

空前の旅行ブームといわれる。

それは旅の好きな人が多いことを示しているわけだが、それでは、人々は旅に何を求めているのだろうか。

本書に収録された懸賞論文の入選作がそれに答えてくれる。

ある人は歴史との対話を求めて名所旧跡を訪ね、またある人は、旅での出会いに胸をふくらませ、未知との遭遇を自己発見の糧としている。別の人は、旅自身をゆっくり味わい自己の体験に磨きをかけ、経験の増幅にひたっている。また、別の人は、旅先で思わぬ拾い物（プラス、マイナス）をして人間の厚みを増している。

人、それぞれ個性ある旅を楽しんでいるわけである。

個性的といえば、極めて個性的な旅は冒険旅行であるが、太平洋をヨットで一人旅はその典型であるし、北極点を目指した女優もいたが冒険旅行は誰でもが可能とはいえない。

しかし、こうした冒険旅行は、サーカスと同じで、みて楽しいが、実行すると怪我をするから、凡人のする旅とはいえない。

したがって、さすがに応募論文の中には冒険旅行的なものはなかったが、当人にとっては、サーカス以上のスリルに満ちた旅であったことが行間ににじみでていた。

このような多様な旅を、本書では、①「歴史との対話」②「自己発見」③「経験の増幅」④「旅の功」の四章に分けて整理してみた。

本書が、読者の皆さんの、これからの旅（人生の旅をも含めて）の手がかりとして役立てば幸いである。

平成元年九月十二日

編　者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もくじ

まえがき……1

序章　旅は学習……森　隆夫……9

自転車通勤から学ぶ……斎藤幸一郎……21

第一章　歴史との対話

古事記巡礼……35

兵共（つわものども）が夢の跡……45
旅がくれた私の生きがい……54
かけがえのない土地……62

第二章　自己発見

ここに日本があった——ウルグアイの旅から——……73
旅で知るもう一人の自分……82
障害が教えてくれた転換の旅——おばあちゃんはメカが好き——……90
人生の岐路となる旅……99

第三章　経験の増幅

人生という旅に出て……111

ママが翔んだ――ニューワイフのアメリカ旅行記――……120
旅と仕事と人生……129
異文化にふれて……137
チュニジア旅行が私に残したもの……145
一つの出会いから――台湾に行って――……154

第四章　旅の功

自転車が教えてくれたこと……165
わがネパール……173
旅の報告――病院待合室をギャラリーに――……182
ツアーの醍醐味――社会としての人間を見つめるために――……190
出会いを求めた旅……199

解説――応募論文「旅は学習」を読んで――……長坂　寛……208
入賞論文執筆者一覧……216
あとがき……218

序

章

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

旅は学習

お茶の水女子大学教授　森　隆　夫

旅は読書

旅は読書といわれる。

旅行を通じ多くのことを学ぶからそういわれるわけであるが、逆に読書は旅のようなものだともいえる。読書を通じて文学の世界や思索の世界に旅立つことができるからである。

旅といえば目的地を定めずブラリと旅に出る人はあまりいない。たいていの人は入念にとはいかないまでも、あらかじめ行先を決めてから出かけるものである。それが、外国の名所旧跡となると事前の準備も大変である。こうした名所旧跡を訪ねる旅は、読書

にたとえれば、古典に親しむようなものといえよう。

例えば国内で芭蕉の歩いた道を旅するのは、文字どおり旅は読書、芭蕉の読書である。

こうした古典の旅に対し、現在話題になっている人や、事件の地を訪ねるのは、ベストセラーの旅といえようか。例えば、新たに総理大臣が誕生すると、総理の生家が観光案内に加えられることになったりするし、リクルート事件のときは、リクルートのビルが観光バスの解説に入ったりする。

このように読書にも古典（不易）と流行があるように、旅にも、不易と流行があるといえる。お伊勢参りや四国八十八ヶ所巡り等は古典的旅であるのに対し、最近各地で開催されている博覧会への旅は、ベストセラーの旅である。だが、地方博には赤字のものが多いからベストセラーとはいえないかもしれない。

読書で、古典が流行することがある。つまり、芭蕉がいった「不易と流行」の不易（古典）の方が流行するわけである。その好例が、芭蕉三百年祭の昨今の芭蕉ブームだ。この「不易の流行」という現象を思うと、「不易と流行」という言葉自体が、不易な

のか流行なのかということにもなる。

とにかく、不易が流行するということは不易をよりいっそう不易化することである。この不易の不易化がときどき行われるからこそ、不易が不易でなくなって忘れられないのである。

芭蕉の例でいえば、芭蕉の旅した跡を、その日程（百五十日・二千四百キロ）に合わせて全行程を旅した人がいた。それも外人である。その人の名はロバート・リードといい、彼は、芭蕉の旅をただ追体験しただけでなく、芭蕉の俳句に合わせてスケッチまでして、俳句の英訳も添えて、『ぼくの細道』という本にしている。

ところで、芭蕉の日程（五月十六日出発）に合わせて、旅をしながらスケッチをするには、芭蕉の旅のテンポより速く歩かないとスケッチの時間が生まれてこないことに気付かねばならない。したがって彼は、芭蕉より早足で旅したことになるのだが、幸いにもというか彼は元マラソンの選手でもあった（現在は画家）。

このような好条件、好都合が重なって、スケッチ入りの英訳俳句集が誕生したわけである。

この本は、実に興味に満ちあふれている。単なる芭蕉愛好者だけでなく、絵心のある人にも、英文学者にも、俳句の研究者にも、旅の好きな人にも、さらに、好奇心の強い人にも読者の層は広まると思う。こうなると、もう旅と読書は合体しているといえる。

一見から百考を

読書を通じて旅をする好例が、こうした旅行記を読む場合であろう。

芭蕉の句とスケッチを見ながら、なるほど、なるほどといっているうちに自然に旅をしているような気になる。空想の輪が広がるわけである。

最近は、TVで旅をすることが出来るようになった。その典型が、毎週日曜日に放映されている「兼高かほる世界の旅」である。我々はもうそのおかげで世界の旅は終わっているはずである。ところが現実は、海外旅行ブームが続いている。これはいったいどうしたことだろうか。

それは、TVによる旅の限界を示している。つまり、「兼高かほる世界の旅」というTVを通じての旅は、間接経験旅行であるという点にある。視聴覚による旅である。

これに対し、実際の旅は直接経験の旅であり、五感をフルに活用した旅である。

この間接経験と直接経験の差異は、何もＴＶに限らず、読書の場合にもいえる。本に書かれていることは、読者からみればすべて間接経験にすぎないのである。つまり、間接経験の集積が一般化され知識となっているわけである。

昔の人は、この差異を「百聞は一見に如かず」として訴えてきたのである。ところが、読書時代はそれでもよかったが、ＴＶ時代に入ると、「百聞は一見に如かず」の「一見」の方も、実際に旅をしなくても、ＴＶの映像で見ることができるようになった。したがって、ここで、「百聞は一見に如かず」を補う新しい諺をつくる必要になったわけである。

それはどういう諺になるのだろうか。視聴覚情報を補うものということになると、「百見は一触に如かず」とか「百見は一臭に如かず」とか「百見は一味に如かず」となる。

そういえば、ＴＶで見るグルメ旅行というのは、見ている方は見るだけで味わえないから、少しもおいしくはない。それなのに、ブラウン管では、おいしそうに食べている。さらに悪いことに、試食しているタレントの発する言葉は、これまた皆同じで、「おいしい」の一語だけである。他に表現はないのかと誰かが新聞で批判していたことを思

い出す。その人は、「おいしい」という言葉を彼らに禁じたらいったいどういう表現をするだろうかというものであった。

例えば、食べている本人のおいしいという主観を、客観化するには、もっと具体的な表現があってしかるべきだということになる。映画がおもしろかったとか、この本はおもしろかったといってみても、その映画や本を見ていない人には、どこがどうおもしろかったのか、さっぱりわからないのである。本人の主観を第三者に伝えるには、もっと具体的な表現をすべきなのである。例えば、○○○のようにおいしいとか、○○○を焼いたような味でおいしいというようにである。

このように考えてくると、「百聞は一見に如かず」という諺の補完を考えることも大切だが、それ以上に大切なのは、自ら考えて表現することだということになる。

したがって、新しい諺は、「百見は一考に如かず」ということになる。

昔の人は、旅に出るとき、「百聞は一見に如かず」といって旅立ったが、今日では、「百見は一考に如かず」とか、「一見から百考を生む」といってジェット機のタラップを上がるべきなのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c